

人権保育専門講座2（三重県委託事業）

保育のなかの私

～気づく 見つめる ふり返る 解放する～

西原 美保子 さん（常磐会短期大学）

人権保育専門講座2は、常磐会短期大学の西原美保子さんに、「保育のなかの私 ～気づく 見つめる ふり返る 解放する～」と題して、四日市、鈴鹿、津の3会場でご講演いただき、58名の方にご参加いただきました。

西原さんは、これまでの勤めてこられた保育現場で、子どもや保護者の思いや願いにふれ、また様々な出会いをとおしてご自身の保育観が変わってきたと語られました。



～たくちゃんのこと～

おしっこをもらしてしまうことがよくある、たくちゃん（仮名）という子がいました。たくちゃんに対して、冷やかしゃ「くさい」「手をつなぎたくない」というまわりの子どもたちの様子がみえてきます。私はそうしたとき、機会をみつけて、意識的に「西原先生、おしっこちびってしもたわ」と言うようにします。

子どもたちは、先生が大好きだから、すごく心配してくれます。保育士が本当に困ったように、気持ち悪いということを伝えれば、冷やかす子はいません。「先生、私のパンツかしたるわ」「私の使って」と言ってくれます。

また、生活の何気ない場面で、「みんなは、おしっこちびったことない？」「ちびったとき、どんな気持ちやった？」と、おしっこで失敗したときのことを思い出させるような言葉かけをします。そうすることで、「たくちゃんだけじゃない」「自分もちびること、ある」と、子どもたちはたくちゃんの失敗を、自分と重ねてみようとしていくのです。

また、失敗してしまった下着は洗えば気持ちよくなる、というところから、クラスみんなで洗濯あそびにつなげてきました。

「公平」を考えるワーク（4～5人 1グループで）

えびせん1枚とチョコレート数個を公平に分ける方法を考え合いました。分け終わった後、どんなふうに分けたかを各グループから発表してもらいました。



「なべなべそこぬけ」の歌

上記のグループで、子ども役の参加者が「なべなべそこぬけ…♪」と歌いながら、「底が抜けたら…」の後で或る動作（「かえりましょ」の代わりに「…ハグしよう」などと歌いながらその動作）をします。先生役の参加者がどんな声かけをするかのロールプレイを行いました。

（西原さんより）

子どもたちの活動に対する先生方の声かけは似通ったものになりがちです。先生方は、「子どもたちの語彙が少ない」と、保育士どうして話すことがよくあると思います。「楽しそうだね」「うまくできたね」等の声かけでも、子どもたちはとてもうれしいのですが、「先生もいれてほしいなあ」などと返して、“先生も一緒に遊びたいのかな”と子どもたちに思わせるのは、子どもたちの自尊感情を高め、語彙を増やすのにつながっていくのではないかと思います。

「変身遊び」

最初の姿と比べて5カ所変わったところを見つける遊びを行いました。



☆なぜ「変身遊び」を広めたいと思っているか

子どもたちは自分に注目されることでうれしいと感じます。相手を知っていくことがとても大切です。

保護者に関しても、保育士がほんの少しの違いに気づくことで、そのことをきっかけに会話ができるようになります。“あなたのことを知りたい”という気持ちを含んだ言葉がけは、子どもにも保護者にも地域の人々に対しても、関係づくりのきっかけになるのです。



保育者自身の立ち位置や視点をふり返る

私は40年間の保育現場で、障がい児保育、同和保育、人権保育をとおして、「子どもの人権尊重」の視点や「子どもは権利の主体である」という視点を学んできました。しかし、振り返ってみると、「子どもの人権尊重」と口では言いながら、子どもや保護者の目線に立っているつもりで、立つことができない自分がいました。そんな私がたくさんの出会いをさせてもらいました。人と出会うなかで、考え方やものの見方に気づき、自分自身が変わってきました。

私を大きく変えてもらったのは、同和地区を含む保育所に転勤したことでした。そこに転勤する前にもいろんなことを学ばせてもらいましたが、私はその保育所で差別の現実を目の当たり

にし、自分自身を見つめ、ふり返ることになりました。その保育所で出会った二人の子どもたちとその保護者とのかかわりによる私の変容をお話しさせていただきます。

～ひろみ（仮名）のお父さんとの出会い～

ひろみの父親は、被差別部落に生まれて、結婚のときには、相手の親から反対されるという差別を受けていました。相手の家族についても、結婚したことが原因で、きょうだいも離婚したり、親戚との関係が壊れたりしたそうです。その父親からは、私に「おれの命がこの世にあるというのは、アカンのかなあ」と言われたことがありました。そして、何回も死のうと思ったということも話してくれました。

子どもが生まれたときのことも話してくれました。看護師さんが「お父さん、抱いてあげて」と赤ちゃん（ひろみ）を連れてきてくれたとき、「この子、ほんまに生んでよかったんかなあ、俺と同じように差別されへんかなあ、結婚差別に遭わへんかなあと、いろいろ考えてしまっ、そう考えたら、2～3秒やったかもしれやんけど、恐くて抱けなかったんや」と言われました。私は、ひろみちゃんが誕生したときの父親の思いを聞かせてもらい、わが子が生まれたときの自分や自分の周りの人たちの喜びと重ねて、「なんで、同じ命でありながらこんなふうにならなければならないのか」と、本当に差別を憎み、なくしたいと思うようになりました。「自分は差別してない」「差別はおかしい」とは思っていたけれど、この父親から「差別の現実」を聞かせてもらうなかで、差別に対する怒りを実感としてもつことができた場面でした。

～しんや（仮名）のお父さんとの出会い～

しんやの両親は在日韓国人の方でした。結婚差別を受け、父は自分の気持ちを閉じこめて生活していました。父親はしんやちゃんのことを叩いたり、外へ出したりして、厳しい子育てをしていました。保育所では、しんやちゃんに理由はあるのですが、周りの子どもたちに手を出してしまうことが多くありました。周りの保護者からは「またしんやちゃんが泣かせた」という声をよく聞きました。保育所にお迎えに来たしんやちゃんの母親は、子どもの姿がまだ見えない所から泣き声が聞こえると、確かめずに「また、うちのしんやが誰かを泣かしたんや！」と下を向いて迎えにくる姿があったのです。子どもどうしのトラブルでしんやちゃんの父親と話をする、いつも父親は「しんやが周りの子に手を出すようなことあったら、先生、絶対止めてな」「韓国人はちゃんとしとかなあかんねん。正しくしてないと日本人から差別されるんやから」と言われていました。

そんな保護者との出会いが、それまでの私の保育観を大きく変えてくれました。言葉だけではなく、自分の命や友だちの命を大事だと子どもたちが思えるような保育、周りの家族や近くの人たちが今ここにある「この子の命」を大事だと思える保育をしていきたいと思うようになりました。



絵本の読み聞かせの取組

これまでの自分をふり返ったり見つめ直したりしていくなかで出合った、特に印象深い1冊の絵本があります。「ぼくはおおかみだ」という絵本です。(この本はもうすでに廃版になっています。)

今年度は、参加者の中からお一人の方にこの絵本の読み聞かせを行っていただきました。

読み聞かせの後、先ほどのワークと同じグループで、感想や意見などを出し合ってもらいました。



ぼくは おおかみだ

クロード・ブージョン 作 末松氷海子 訳



あるところに自分がおおかみだということを知らない子どものおおかみがいました。

おおかみは、はえやちょうちょうがとびまわるのを見ているのがとても好きでした。

畑や森にすむ動物たちとも、とてもなかよしでした。

けれども…………。

子どものおおかみがだんだん大きくなってくると、なかまの動物たちは、へんな目つきでおおかみを見るようになりました。

日がくると、沼のほとりは、なんだかしんぱいそうなようすになります。

おおかみといちばんなかよしだったひつじまでが、とうとうこまった顔でいました。

「だめなんだ。ぼくたち、もういっしょにあそべないよ」

ある晩、おおかみが沼のそばへやってくると、いつものなかまたちがおお声をあげて、にげだしました。

「もうこの沼で水をのむのはやめよう。ぼくたちだけのべつの場所をさがそうよ」

おおかみは水にうつった自分の顔をじっと見ました。

「ほんとうにぼくは、うさぎにもひつじにも、りすにもにてないや。ぼくの顔はなんにもしなくても、みんなをこわがらせる。だから、みんな、ぼくからにげていっちゃうんだな。ようし。

それなら、これからはわざとみんなをこわがらせてやるぞ」

そこでおおかみはきばをむきだして、おそろしいうなり声をあげました。

子ウサギたちはおびえました。

(以下、省略)

この本の読み聞かせをしている間、しんやちゃんは全然聞こうとせず、後ろの方であちこちしていました。私はこの絵本から伝えたいこと、感じたことをなにも言わずにいと、(以前の私なら、自分の思いを押しつかけたり、私の感じることを発言する子に対して「そうだね」と評価していたのです。) 子どものなかから「このおおかみ、しんやちゃんといっしょやなあ」「しんやみたいや」「おおかみおこらせたのまわりのどうぶつやん!」とつぶやきが出てきました。また、「自分たちも、しんやのこと、こわいって決めつけてるよな」とか、「おかしいよな。うさぎだって、みんな顔違うのに、おおかみだけ違うとか、おおかみだけ大きくなって怖いとか、おかしいよな」ということを言います。子どもたちが素直にもつ感性に感動すら覚え、私はどれも否定しませんでした。

そうしたつぶやきを出発点にして、「このお話の続きをみんなで作ってみよう」と提案したら、子どもたちはいろんな意見を出し合って、「みんなでいっぱい遊ぼうぜ」という劇をつくっていききました。また、何度も繰り返して読んでいったなかでの子どもの様子やつぶやきを、保護者の方にも伝えていくことを大事にしながら子どものことを考えていく機会にしていきました。



最後に（「気になる子」のとらえ方について）

「気になる子」という言葉は、保育や教育のなかでよく使う言葉です。私自身、「気になる子」のとらえ方が間違っていることに気づきました。私は子どもたちに面白いと思ってもらいたいとか子どもたちから好かれたいなど、自分が中心になっていました。自分の言うことを聞いてくれない子や、手を出したり、泣いていたり、私にとって保育をしにくい子を気にしていました。そして、「なんでこの子、私の言うこと聞いてくれへんのやろ」、「どうして私のすることに笑ってくれへんのやろ」等、私にとって保育をしにくい子を「気になる子」としてとらえていました。

しかし、本当に気にしないといけなのは、たとえば仲間から決めつけられ、関係が閉ざされている子、孤立し自信をなくしている子等、人権が大事にされていない子が人権保育における「気になる子」なのではないかと思えます。同じ「気になる子」という言葉でも、気にしていく視点が違うのです。保育をしていくときに、先生方が何を中心に据え、どんな活動によって子どもにどんな力をつけていきたいかを皆さんと共に考え合いたいと思えます。



参加者アンケートより



- 「気になる」のとらえ方、自分自身もしっかりみつめ直したいと思えました。私自身も自分中心の保育になってしまっていると反省しました。子どもたちの姿をとらえられる保育をしたいと思えます。
- 自分の保育のなかで耳の痛い話もたくさんありました。さっそくふり返り、今後の保育に活かしていきたいです。日頃の自分の言葉掛け、行動など、ひとつずつ気にかけていくことが人権保育につながるということをいつも心にとめておきたいです。

- 分かりやすいお話と、先生自身の体験と、実践にすぐ使えそうな手遊びも教えていただき、参加してよかったなと思いました。西原先生のお話を聞いたのは初めてだったのですが、楽しくて「あーそういうことか」「あー私もそうしてしまうわ…」など、共感できたり、「なるほど」と思うことがあったりして、勉強になりました。
- “公平を考える”でお菓子を使っただけの実践は初めてでびっくりしましたが、そんな時の子どもの姿からも分かることがあることや、遊びをとおして見つめたり気づくことや自分を出したりふり返ることが大切だと思いました。気にしていく視点や絵本をとおして考えさせられました。先生の人柄があふれる講演でした。
- 西原先生が保育の現場で経験・実践されたお話を聞いて、“人権保育”とはどのようなものか、伝え方や伝えるポイントは何なのかを知ることができました。「最後に…」の部分で聞かせていただいた、保育士中心の保育を自分はしているのではないか、また自分の言動が知らないうちに子どもたちを傷つけていないか、と考えさせられました。
- 初めて西原先生の講座を聴かせていただき、すごく元気が出ました。心が温かくなりました。実践ありき！子どもと一緒に毎日を全力で過ごしていく楽しさ、心地よさ、色々なことがよみがえり、熱い気持ちになりました。機会があれば、またお聞きしたいです。
- 昨年の講義でお聞きしてもう一回聞きたいと思い、参加しました。分かりやすく教えていただき、今年度はクラスで実践していきたいと思いました。人と合わせる、自分本位にならないことの大切さを感じました。仲間づくり、気になる子の捉え方、今一度見直していきたいと思いました。
- 子どもたちの見方についてお話を聞かせていただき、教師のとらえ方で子どもの姿も変わってくることも改めて学ばせてもらいました。実践で使えるような遊びも教えていただき、子どもたちとやってみたいと思います。
- 先生の保育への熱意、人権意識がとても素敵すぎて涙が止まりませんでした。おとなのとらえ方が子どもにも左右すること、やはり主人公が子どもでなくてはならないことがよくわかりました。困り感をよく知り、守ることができる保育士になりたいです。人権保育とは、人の命を大切にすること、それらを意識して今後いろいろな立場の子どもたちの気持ち、保護者の気持ちを大切にくみ取れる保育士になりたいと思います。
- 保育実践を交えての話だったので、共感できるどころ、自分が気づいていなかったところに気づくことができました。保育者の苦手なことや失敗を見せたり、恥ずかしいことではないことを伝えていきたいと思いました。気になる子の見方も再度ふり返っていかうと思います。「ぼくはおおかみだ」は何度も読んでみたいと思いました。

